

シミ抜き代は基本無料

「稲村ドライ」(新潟市)

「クリーニング屋は落として当たり前」とこともなげに言う稲村ドライの店長・稲村公一さん。読者にはこっそり教えよう、クリーニング店ほど店によって技術力の差が歴然としている業界はない。真のプロフェッショナルを知られば、もう他に出す気にはならないかも・・・

シミ抜き代は基本無料

作業場の中はかなりの熱気。それでも冷房が入っているのだという。その冷気はスチームアイロンから噴出する蒸気などで相殺されているようだ。これから夏本番を迎え、

「一般的な皆さんは、意外にクリーニング屋などこも同じ」と思っている人が多いようです。実際、研究熱心な店とそうでない店のレベルの差

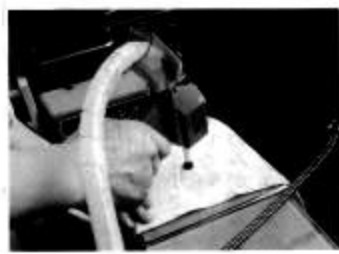
は大きいのです。工程からして違います」(稲村店長) 稲村ドライは昭和35年に、稲村店長の父・公志郎さん(現代表)の手で開かれた。地元では、シミ抜き達人の店としてつとに有名だ。

お手軽がもてはやされる時代に、自家車で3時間もかけて同店に持ち込む客もいる。さすがに郵送でのクリーニングは請け負わないが、インターネットなどで噂を知った人が、他県から仕事を頼んでくることもある。

クリーニング店には「クリーニング師」という県知事時代に、自家車で3時間もかけて同店に持ち込む客もいる。さすがに郵送でのクリーニングは請け負わないが、インターネットなどで噂を知った人が、他県から仕事を頼んでくることもある。

免許を持つ者を最低1人置かなければならない。大手チェーン店の大きな工場などでも、有資格者はたいてい一人くらい。あとはパートで賄っているケースがほとんど。

そんな中、「ウチは私と父だけでなく、母親も、妻も免許を取得していますよ」(稲村店長) 父親は地元クリーニング業界が集まる勉強会「みやび洗いまき研鑽会」の代表を務める新潟の、カリスマクリーニング師。母親はなんと県知事免許の試験官。まさ



例えば有名チェーン店などに出しても、特殊工賃を取られた上に、落ちませんでした。とシールを貼られて戻ってくることもある。あれは本当に落ちないのだろうか。 「汚れである以上、落とす」と自体はできます。

ハードルの高さ

職人魂をかき立てられる時。について聞くと、「やはり、他店に出したが落ちなかった。と、お客様が持ち込まれた時ですね」と答える。

そんな稲村店長の仕事場は、想像していたクリーニング店のバックヤードとはギャップがある。まるでアーティストの工房のような佇まい。色とりどりの染料がパレットにあり、そこに絵筆が添えられている。自作のカラータートまでしつらえ

「シミは基本的に落ちます。必要なのは、修復し、仕上げ

る技術と知識です」(同) 例えば、大量の洗濯物をこなす。大工場。にクリーニング師が一人しかいないような大手チェーン店で、こうした作業が可能かと言えば物理的に不可能だろう。

クリーニング店に出したけど、落ちませんでした。のシールが貼られて戻ってくるケースは、言ってみれば落ちませんでした。ではなぜ落ちませんでした。と表記するべきなのだろう。

作業台に広げられた。商品は上等な仕立てのシャツにペンキかなにかの汚れが付着したもの。一見して致命的とも思われる。

まず配合した薬品でシミを丹念に扱いた上で、色掛け修正を施す。クリーニング店のバックヤードでこんな作業が繰り返されている。

困難なのは、シミを落とす際に、汚れの近くにある色柄と一緒に落ちてしまうよう

なケース。こういうときは、落としたい色柄に色留め剤を施し、色を留めながらシミを落とす。

単なる汚れだけではない、例えば日焼けして色落ちしたような服だつて修復できる。優れたクリーニング師は色のスペシャリストでもある。

「ドライクリーニングの看板を出していますが、自分自身では水洗いにこだわっていきたくない。水洗いにはクリーニング屋の技術力の差が出ますし、汚れが落ちるのはやはり水洗い。汗汚れなどは水洗いでなければ落ちませんからね。要は仕上げの技術なのです」と力を込める。

プロのクリーニング師が4人いる店は、実に厳しい目にさらされている環境でもある。仕上げが完璧でなければ、すぐさま作業場に戻される。

これがハネられて

